

小林 毅, 東 祐二, 渡辺愛記 (編)

生活の行為を紡ぐ作業療法プラクティス 急性期作業療法マネジメント シームレスにつなぐ早期のアプローチ

高 畑 進 一
(大阪府立大学, 作業療法士)



題名の通り, 随所に作業療法をシームレスに提供する知恵が示された書である。時間の限られる急性期においては OT が何をすべきか, いつ行うべきか, という観点が優先されることが多いと思うが, さらに一步踏み込んで, なぜそれを行うべきかという観点を重視することの大切さをあらためて認識させてくれる書でもある。

わが国の医療制度の変革に伴い, 急性期のセラピストには, 短期間で, 多数の対象者に, 良質で安全な介入を実施することが求められている。それは効果的かつ効率的な介入というニーズである。これを可能にする方法の一つとして, 急性期にはクリニカルパスを用いることも多い。クリニカルパスは科学的根拠に基づいた方法を一定の質を保って提供すること, いわば提供する医療の標準化を目的としている。このように書くと, 「やはり急性期にセラピストが行うことはおおそ決まっている」, あるいは「疾患や障害の種別, 対象者の状態によって介入の方法

や時期に多少の差はあっても, 短期間に OT ができることは限られている。その結果, 対象者に提供する介入はほとんど同じになってしまう」という誤解を招くかもしれない。標準化と画一化は同義ではないのだが, 急性期の OT, あるいは急性期の医療そのものに対してこのような誤解が生じている可能性がある。また, 急性期にかかわる OT や医療関係者自身がこのような誤解をしているかもしれない。一部かもしれないが……。

きっとこのような思い, 懸念が, 本書の編者と著者に共有されていたのと思う。それが, 本書の特徴となっている。つまり, 本書には, 急性期の OT が何を行うかという観点だけでなく, なぜそれを行うのか, どのように行うのかという観点を重視した知識と技術が盛り込まれている。同時に, 経験豊かな OT の思考の流れが随所に示され, 読み手の理解を深めてくれる。初学者にもわかりやすい構成である。

読み終えて, 対象者の眼前にある可能性の扉を開くために, OT が対象者の過去を知り, 将来を見据えて「今」にかかわることの重要性にあらためて気づかされる。それは OT が想像力を働かせて対象者の人生を縦断的に眺め, 「今なすべきこと」を考え, 実行すること, そして, つなげることである。このあたりまで, とても重要な実践の基軸になるのが「対象者にとって意味ある作業を同定し, それを目標とする介入によって意味ある生活・人生を取り戻す」という OT の信念なのである。そんなことまで考えさせてくれる書である。

急性期の OT を学ぶ学生諸氏, 急性期にかかわる新人 OT, 急性期の OT に悩んでいる方々にぜひ読んでいただきたいと思う。

B5 判 192 頁 5,000 円 + 税
文光堂 刊
☎ 03-3813-5478